

朝、学校に通う里子を駅まで送り、帰りに近くの河原に車を止める。それが日課になっていた。

目の前に日光連山の美しい景色が広がり、澄んだ川の流れや、風に揺れる岸辺の草花、川石をびよんぴよんと渡っていく小鳥や、羽を広げて、ゆっくり空を飛ぶ鳥。それらを、音楽を聴きながら、ぼんやり眺めていると、今ある問題の全てを受け入れられるような気持ちになった。

私は、児童虐待防止のNPOの立ち上げに関わり、子どもを保護するという思いで「養育里親」になった。戸籍上も親子関係になる「養子縁組里親」とは違い、一定期間、子どもを養育する養育里親を、栃木県では愛称で「とちのきフォスタ―」と呼んでいる。

長年、児童養護施設で子どもたちに関わってきた人が、養育について「解決しない問題に耐える力が必要だ」と言っていた。多くの

問題に直面してきた人の言葉だと思ふ。子育ては親の思い通りにいかないことが多い。施設や里親の元で育つ「社会的養護」の子どもたちの養育では、なおさらだ。

あり、里親をやめたいと思うこともあった。また、里子の問題で眠れなくなったこともある。その時、心理療法や教育、哲学、宗教などさまざまな本を読んだ。愚痴も聞いても

高校を退学になって、数年後に就職が決まり、家を出て行った子がいる。その子のアパートの前を通ると、窓の外に仕事着とTシャツがきちんと並んで干しあつた。家にいた頃は洗

く子、困ったときにだけ電話をしてくる子、音信不通になっている子もいる。いろいろな子がいるが、里子たちもまた、同じように悩みなながら、現実を受け入れてきたのだろう。時には失敗しても、成長し、自立して、一生懸命に生きているのだ。そして何とかなって

解決しない問題に耐える

はたげやま
のりお
島山 憲夫



それまでに実子を3人育ててきた私は、子育てに多少の自信があつた。しかし、里子たちと暮らしているうちに、その自信は無くなつてしまった。言うことを聞かない。不機嫌な態度をとる。学校に行かない。学校で問題を起す。家に帰ってこない。警察や裁判所のお世話になる。親として悩んでしまうことがいろいろ

らつた。毎朝、子どもを送つた後に河原へ行くのも、その頃に始めたことだ。問題を解決するためではなく、耐えるためだつたと思

濯もしなかつた子が、頑張っているなど、ほつとした。毎年正月には手土産を持って帰ってくる子、仕事ついでに現れてご飯を食べてい

う。この喜びがあるのだと思

かかない。不機嫌な態度をとる。学校に行かない。学校で問題を起す。家に帰ってこない。警察や裁判所のお世話になる。親として悩んでしまうことがいろいろ

う。問題に心がつぶされないう。自分エネルギーを補給した。流れ続ける川の水を見て「大丈夫、何とかなる」。そう感じていた。そして確かに、いつの間にか何とかなつていた。

とちぎ家庭養育推進協議会代表理事。フリーの映像ディレクターとして28年間、テレビ番組を制作。2005年に日光市での児童虐待防止のNPO法人立ち上げに参加し、里親となる。10年にファミリーホーム「虹の家」を設立。21年より現職。県里親連合会会長。東京都出身。同市在住。68歳。